

内分泌腫瘍



【犬の甲状腺腫瘍】

●プロフィール (犬)

・発生:全腫瘍中約2%。頭頚部腫瘍の10~15%。

·年齢:平均9.6歳(7~18歳)。

・性別:ヒトでは女性に多いが、犬では性差なし。

・好発犬種:ビーグル、ボクサー、G・レトリバー、シェルティーに好発。

・病理組織学的所見:90~95%は悪性、ほとんどが腺癌(濾胞状腺癌>乳頭状腺癌)。

・発生状況:通常、大きく、非機能性、片側性、浸潤性。

部位:一側性2/3 両側性1/3 まれに異所性甲状腺:舌基部~縦隔内

機能性:甲状腺機能亢進症 5%以下

・挙動:局所浸潤性強く、転移性も高い。初診時転移率は30~40%(1/3)。

転移部位:肺、リンパ節、頸椎、副腎、心臓、腎臓、肝臓、脳。

転移率:大きさ[20cm3以下]14% [20~100cm3以下]74% [100cm3以上]100%。

両側性は片側性の16倍の転移率。

転移巣の進行は比較的遅いとされている。

・甲状腺機能:甲状腺癌の多くは非機能性。甲状腺機能は約半数で正常、18~35%で機能低下症 (非再生性貧血、高コレステロール血症)、10%以下で機能亢進症。

・TNM 分類 (犬の甲状腺腫瘍)

(T) 原発腫瘍の大きさ TO 腫瘍は認められない

T1 ~2cma.固着なしb.固着ありT2 2~5cma.固着なしb.固着ありT3 5cm~a.固着なしb.固着あり

(N) 所属リンパ節転移の有無

NO 所属リンパ節に浸潤なし

N1患側リンパ節に浸潤a.固着なしb.固着ありN2両側のリンパ節に浸潤a.固着なしb.固着あり

(M) 遠隔転移の有無 MO 遠隔転移なし

M1 遠隔転移あり

・ステージング

1	Tla.b	NO(-) N1a(-) N2a(-)	MO
11	TO	N1(+)	MO
	Tla.b	N1(+)	MO
	T2a.b	NO(+) N1a(-)	MO
Ш	T3a.b	Nに関係なく	MO
	Tに関係なく	N1b N2b	MO
IV	TNに関係な	<	M1

・治療法:主に外科手術。十分な外科マージンをとった拡大切除術が必要。

外科手術不適応例や外科手術と併用して放射線療法。

被膜外浸潤症例や脈管内浸潤がある症例や、リンパ節転移や遠隔転移症例に対しては術後に抗癌剤による補助的化学療法を考慮するが、遠隔転移性が高いことから前述した所見がなくても積極的に検討。

*犬の甲状腺癌

・症例:ウエルッシュコーギー、9歳9ヵ月齢、去勢雄。

・主訴:頸部腫瘤に気づき近医を受診、甲状腺腫瘍の疑いと診断される。

専門的診断および治療を目的に当院受診。

・症状:左腹側頸部の皮下に腫瘤、一般状態は良好。

・検査:左腹側頸部の皮下腫瘤は4.2×2.6×2.3cm、固着なし。

心エコー検査にて僧帽弁閉鎖不全症、三尖弁閉鎖不全症、大動脈弁閉鎖不全症を確認。

リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。

甲状腺機能検査にて、T4 11.9 µg/dl、fT4 > 6.0 ng/dl。

・臨床診断:機能性甲状腺腫瘍 T2a N0 M0 ステージ II。





左腹側頸部の皮下腫瘤

術中所見

切除した左側甲状腺

・治療:チアマゾールによる抗甲状腺治療後に外科手術による拡大切除術。

・確定診断: 左側甲状腺癌 T2a N0 M0 ステージ II マージンクリアー 脈管内浸潤あり



内分泌腫瘍



【猫の甲状腺腫瘍】

●プロフィール

·年齢:平均13歳。

・病理組織学的所見:大部分は腺腫あるいは腺腫様過形成。癌腫は1%未満。

· 発生状況: 通常、機能性、両側性。

部位:腺腫あるいは腺腫様過形成症例の約70%が両側性

機能性:甲状腺機能亢進症 90%以上

・挙動:局所浸潤性および転移性はまれ。

・治療法:主に抗甲状腺薬あるいは食事療法(y/d)による内科療法。

内科療法が困難であったり、根治を目的とする場合には外科手術。

*猫の甲状腺腺腫

·症例: 日本猫、18歳齡、避妊雌。

· 主訴:頸部腫瘤。

・症状:腹側頸部の皮下に腫瘤、一般状態は良好だが軽度の体重減少を認める。

・検査:右側腹側頸部の皮下腫瘤は1.4cm、固着なし。
リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。
検査にて、T4 1.7µg/dl、fT4 1.5ng/dl、TSH 0.33ng/ml、intact-PTH 9.7pg/ml。

・臨床診断:非機能性甲状腺腫瘍。



右腹側頸部の皮下腫瘤



術中所見



切除した右側甲状腺

・治療:外科手術による右甲状腺切除術。

・確定診断:右甲状腺腺腫 マージンクリアー 。

・経過:術後、定期検査のみ。 2016年1月現在、術後3年11ヶ月(22歳齢)経過するが再発なし。



内分泌腫瘍



【副腎腫瘍】

●プロフィール(犬)

· 発生:全腫瘍中0.17~2%。

・分類:皮質腫瘍と髄質腫瘍に大別され、それぞれ機能性と非機能性に分類される。

【機能性副腎皮質腫瘍】

コルチゾール産生腫瘍:猫よりも犬の発生が多く、副腎腫瘍の80%を占める。 犬の発生年齢中央値 は

11.3歳、雌の方が発生が多い(63~73%)との報告あり。

性ホルモン産生腫瘍

アルドステロン産生性腫瘍:犬よりも猫の発生が多い。

【機能性副腎髄質腫瘍】

褐色細胞腫:発生率低くまれな腫瘍。局所浸潤性強く、カテコラミン産生により血行動態に悪影響を及

ぼす。

・TNM 分類 (犬の副腎腫瘍)

(T) 原発腫瘍 TO 腫瘍は認められない

T1 境界明瞭な腫瘍

T2 隣接器官に浸潤

T3 血管に浸潤

(N) 所属リンパ節転移の有無 NO 所属リンパ節に浸潤なし

N1 所属リンパ節に浸潤あり

(M) 遠隔転移の有無 MO 遠隔転移なし

M1 遠隔転移あり

・治療法:外科手術による副腎摘出が第一選択。合併症が多く周術期死亡率も高いため、設備が整った手術経験 豊富な施設で行う必要がある。外科手術により、良性では根治が可能であり、悪性でもある程度の 良好な予後が期待できる。犬の副腎腫瘍全体における外科手術の中央生存期間はおよそ2~2.5年 程度。

被膜外浸潤症例や脈管内浸潤がある症例や、リンパ節転移や遠隔転移症例に対しては術後に抗癌剤 による補助的化学療法を考慮する。

外科手術不適応なコルチゾール産生腫瘍例にはトリロスタンなどによる内科療法を行う。 中央生存期間はおよそ12~14ヶ月程度。

・予後因子: すでに転移がある症例は不良。

*犬の副腎皮質腺癌

・症例:ミニチュアシュナウザー、12歳11ヶ月齢、避妊雌。

· 主訴:健康診断。

・症状:一般状態は良好。

・検査: 左副腎腫瘤 2.1×1.5×2.7cm、右肝区に腫瘤2.8×2.1×3.1cm が判明。 CT検査にて隣接臓器浸潤なし、血管浸潤なし、リンパ節転移所見なし、肝臓腫瘤はCT値低く、出血 あるいは壊死組織などが考えられた。

· 臨床診断:機能性左副腎腫瘍 T1 N0 MX (肝臓転移?)。



術中所見



切除した左側副腎

・治療:外科手術による左副腎切除。

・確定診断:副腎皮質腺癌 T1 N0 MX マージンクリアー 脈管内浸潤あり。

・経過:術後、カルボプラチンによる補助的化学療法を3回実施。 術後4ヵ月、新たな肝臓腫瘤が判明、CT検査にて方形葉の壊死あるいは肝細胞癌が疑われた。 その後、肝臓腫瘤に変化なく、術後2年11ヶ月に慢性腎機能障害により死亡。 最後まで再発・転移はみられなかった。

*犬の副腎皮質腺腫

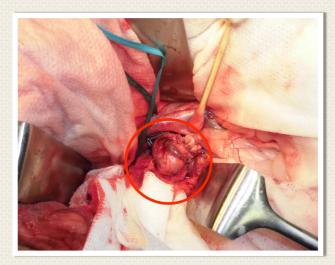
・症例:シーズー、13歳齢、去勢雄。

·主訴:多飲多尿。

・症状:一般状態は良好。

・検査:右副腎腫瘤 2.1×1.8×1.8cm。 CT検査にて隣接臓器浸潤なし、血管浸潤なし、リンパ節転移所見なし、遠隔転移所見なし。

· 臨床診断:機能性右副腎腫瘍 T1 N0 MO。



術中所見



切除した左側副腎

・治療:トリロスタン療法後に外科手術による右副腎切除。

・確定診断:副腎皮質腺腫 マージンクリアー。

・経過: 術後、定期検査のみ。 2016年1月現在、術後1年8ヶ月経過するが再発なし。

*犬の副腎皮質腺癌

・症例:雑種小型犬、13歳10ヶ月齢、雄。

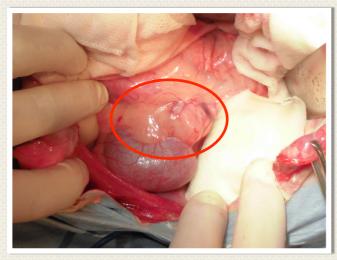
· 主訴: 多飲多尿。

・症状:一般状態は良好。

·検査:左副腎腫瘤 2.1×2.3×2.2cm。

CT検査にて隣接臓器浸潤なし、血管浸潤なし、リンパ節転移所見なし。

· 臨床診断:機能性左副腎腫瘍 T1 N0 MO。



術中所見



切除した左側副腎

・治療:トリロスタン療法後に外科手術による左副腎切除。

・確定診断:副腎皮質腺癌 T1 N0 M0 マージンクリアー 一部に被膜内浸潤あり 脈管内浸潤なし。

・経過:術後、定期検査のみ。 2016年1月現在、術後4ヶ月経過するが再発・転移なし。

*犬の副腎皮質腺癌

・症例:ミニチュアダックスフンド、12歳齢、雌。

·主訴:多飲多尿。

・症状:一般状態は良好。

·検査:左副腎腫瘤 3.4×2.2×2.1cm。

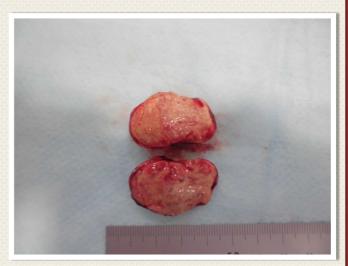
CT検査にて隣接臓器浸潤なし、血管浸潤なし、リンパ節転移所見なし。

肝臓内側右葉および外側左葉に結節病変確認。

· 臨床診断:機能性左副腎腫瘍 T1 N0 MX(肝臓転移?)。



術中所見



切除した左側副腎

・治療:トリロスタン療法後に外科手術による左副腎切除。

・確定診断:副腎皮質腺癌 T1 N0 MX マージンクリアー 脈管内浸潤なし。

・経過:2016年1月現在、術後1ヶ月経過するが一般状態は良好。